

逆しまに読む倒錯 イソクラテース『ブーシーリス』

うえ の しん や
上 野 慎 也

—

修辞といい、レトリックという。いずれも美しく、あるいは効果的にことばを連ねること、話者の期するところを遂げようとする営みであり、端的には所説を相手、聴衆に届ける方途、手段であると理解されている。あるいは「装い」と言おうか。辞ヲ修ムと訓じれば、たしかにことばを整えるのであろうと思う。レトリック rhetoric の語源になった古代ギリシア語の *ῥητορικὴ* が「語る」「話す」を意味する動詞 *ῥω* に由来する「話し手」「弁者」*ῥήτωρ* を基にしていることに鑑みれば、否みようもない。

しかし、ことはそう単純ではない。「修辞」は本来、ことばの技術と関わりがなかったかも知れない⁽¹⁾。*ῥητορικὴ* という術語や概念の出現に際して、まず文字や書写言語の擡頭、すなわち「話す」ではなく「書く」ということが世上しきりと取りざたされ、議論される状況が必要であったとしたら、どうだろう。一筋縄ではいかないものを感じないだろうか。さらに *ῥητορικὴ* の旗手とされる古代ギリシアの書き手、イソクラテースが *ῥητορικὴ* ということばを一切使っていないとしたら——⁽²⁾。

(1) 「修辞」の初出は易文言伝の「君子進徳修業。忠信所以進徳也。修行辭立其誠。所以居業也」とみられるが、ここに所謂「修辞」の解釈は難しい。丁秀菊『『修辞立其誠』の语义学诠释』『周易研究』2007-1(2007)24-33。但し国内にこの巻号を蔵する機関がなく、稿者は華藝線上圖書館所掲の摘要 (<http://www.airitilibrary.com/Publication/alDetailedMesh?docid=10033882-200702-2007-1-24-33-a>) によって、僅かにその概略を知るのみである。文言伝のいう「辞」が「言辞」を意味するのか否かで議論は大きく割れているけれども、時代が下り、この典拠を用いる中で、「辞」を「言辞」とする説がみえるようになる。王齐洲『『修辞立其誠』本义探微』中国社会科学院文学研究所主办中国文学网 (<http://www.literature.org.cn/article.aspx?id=59557>) 「二」以下を見よ。また、白川静『字通』の字形解説を参照のこと。

(2) D. M. Timmerman/E. Schiappa, *Classical Greek Rhetorical Theory and the Disciplining of*

レトリックは西洋文化の根幹を形成している。中世の自由七科の一角を占め、ルネサンス以降の人文書の隆盛も修辞学を抜きには考えられない。とりわけキケローの果たした役割は大きい。時代時代で毀誉褒貶があるにせよ、ラテン語を完成に導き、あまたの作品を残して典範を垂れ、また雄弁のみならず哲学にも通じるキケロー像はヨーロッパの指針であり続けた⁽³⁾。当然、古典語や修辞学の研究、伝授は熱心に行われた⁽⁴⁾。近代にいたってようやくその意義、その範囲が限られるようになり、十九世紀の末には昔日の勢威は地を払ったけれども⁽⁵⁾、しばらくの停滞を挟んで、New Rhetoric のかけ声とともに再び隆盛に赴いた研究状況が⁽⁶⁾、例えば史学の領域で「言語論的展開」を生み出し、二十世紀末のわが国でも相応の影響と大きな爪痕を残したことは記憶に新しい⁽⁷⁾。

二十世紀も半ばを過ぎ、修辞研究が盛り返すのと符節を合わせるように、イソクラテースを扱う論考が陸続と上梓されるようになる⁽⁸⁾。キケローが *pater eloquentiae* と呼んで景

Discourse. Cambridge: Cambridge University Press, 2010; E. Schiappa, 'Did Plato Coin *Rhētorikē*?', *AJPh* 111-4(1990)457-470. 誌名略記法は *L'année philologique* に倣い、ギリシア語古典の典拠は Liddel/Scott/Jones/McKenzie, *Greek English Lexicon* [=LSJ] の記法に従う。

- (3) P. Mack, 'Rediscoveries of Classical Rhetoric' in: E. Gunderson ed., *The Cambridge Companion to Ancient Rhetoric*. Cambridge: Cambridge University Press, 2009, 261-277; 高田康成『キケロ ヨーロッパの知的伝統』(東京、岩波書店、1999)。
- (4) 上野慎也「古典教育と黄昏のイギリス帝国」池田嘉郎編『第一次世界大戦と帝国の遺産』(東京、山川出版社、2014) 246-275; P. E. Harding, 'Demosthenes in the Underworld: A Chapter in the *Nachleben* of a *Rhetor*' in: I. Worthington ed., *Demosthenes: Statesman and Orator*. London: Routledge, 2000, 246-271.
- (5) e.g. A. Chaignet, *La rhétorique et son hisotoire*. Paris: F. Wieveg, 1888. 古典学の訓練を受け、達意の英語と修辞を駆使した史学概論の講演に修辞を取り扱う件が見当たらないことにも注意せよ。E. H. Carr, *What is History?* Cambridge: Cambridge University Press, 1961. 古代の「雄弁術」「弁論術」という実践的な営為が理論へ、文彩へと矮小化するという見取り図は至るところで見受けられる。邦語では例えば、氏川雅典「ペレルマンのレトリック論 「普遍的聴衆」論の再検討」『ソシオロギス』30(2006)50-70、林正子「近代日本における〈レトリック復興〉の背景」『岐阜大学地域科学部研究報告』9(2001)154-140、M. Tomasi (マシミリアーノ・トマシ)「近代日本における修辞学研究の特質 その一つ西洋修辞学変遷の再現」『国際日本文学研究集会会議録』18(1994)91-108。
- (6) D. Cohen, 'Classical Rhetoric and Modern Theories of Discourse' in: I. Worthington ed., *Persuasion: Greek Rhetoric in Action*. London: Routledge, 1994, 69-82.
- (7) 上村忠夫他編『歴史を問う 〈1〉〜〈6〉』(東京、岩波書店、2001-2004)、G. ノワリエル (小田中直樹訳)『歴史学の〈危機〉』(東京、木鐸社、1997)。西洋古代史の立場で整理、応答したものに、大戸千之『歴史と事実 ポストモダンの歴史学批判をこえて』(京都、京都大学学術出版会、2012)。
- (8) N. Livingstone, 'Writing Politics: Isocrates' Rhetoric of Philosophy', *Rhetorica* 25-1(2007) 15-34, p.18 n.7; T. L. Papillon, 'Review: Recent Writings in Greek Rhetoric and Oratory', *CJ*

仰し、ローマ帝政期にあっても修辞の太宗として広く手本とされながら、近代の古典学では「古代文化の陵夷、衰滅はひとえにイソクラテースの責に帰すべし」とまで批判された⁽⁹⁾。「虚栄をよろこび、ものごとの上っ面をなでるばかりのお喋りで、心棒がない」口舌の徒であり、「ギリシア文学が空疎で動きのないものになる兆候がすでにイソクラテースの弁論に看取れる」⁽¹⁰⁾。そのイソクラテースがヨーロッパ概念を提唱し、外交をめぐる提言を行ったとして Europäische und internationale Studien シリーズ第二巻で特集される⁽¹¹⁾。市民教育が取り沙汰されると、ポリスの在り方を論じたイソクラテースが引き合いに出される⁽¹²⁾。イソクラテースが rhetoric を知の伝達手段であり、知を生み出すものと見ていたと説くのは、知識社会学の影響であろうか。伝統的な価値観を理想に仰ぐイソクラテース、目の前の現実に対応することに重きを置き、そのために日和見と断罪されるイソクラテースなど、その著作をもとに復元される著者の姿は様々である⁽¹³⁾。それだけ作品ごとに所説が異なっている。

こうした読み方に死角はないか。イソクラテースの作品群には趣旨が曖昧で分類も困難な書き物が混じっている。その筆頭が第十一番弁論『ブーシーリス』ではないだろうか。一見するにエウローペー構想にも、外交にも、市民教育にも無縁に見えるこの小品である。何が書かれているのだろう。どう読めばいいのだろう。葦の髄からイソクラテースの文業を覗き、*ῥητορικὴ*（あるいはレトリック、修辞）との関係に霎時思いをめぐらす縁としよう。

93-3(1998)331-344; M. Cahn, 'Reading Rhetoric Rhetorically: Isocrates and the Marketing of Insight', *Rhetorica* 7-2(1989)121-144, p.129 n.20 inter alia.

(9) W. Orth, 'Perspektiven der gegenwärtigen Isokrates-Rezeption' in: W. Orth ed., *Isokrates: Neue Ansätze zur Bewertung eines politischen Schriftstellers*. Trier: WVT Wissenschaftlicher Verlag Trier, 2003, 1-6.

(10) Orth 2003, p.1 n.4.

(11) W. Orth, 'Vorwort' in: Orth 2003, vii-viii.

(12) e.g. E. Garver, 'Philosophy, Rhetoric, and Civic Education in Aristotle and Isocrates' in: T. Poulakos/D. Depew ed., *Isocrates and Civic Education*. Austin, Tex.: University of Texas Press, 2004, 186-213.

(13) M. Leff, 'Isocrates, Tradition, and the Rhetoric Version of Civic Education' in: Poulakos/Depew 2004, 235-254. プラトーンの *φιλοσοφία* (の *ἐπιστήμη*) とイソクラテースの *ῥητορικὴ* (の *δόξα*) という対比も相俟っている。

二

イソクラテース第十一番弁論『ブーシーリス』は上古のアイギュプトス王の名を冠した、書簡の体裁を採る一篇である⁽¹⁴⁾。

宛先は駆け出しのソフィスト、ポリュクラテースである。彼は新作『ブーシーリス擁護弁論』『ソークラテース告発弁論』の成功に鼻息が荒い。しかし練達のイソクラテース（とおぼしき文中の「私」）から見ると、その行論は本末転倒である。擁護弁論では擁護すべき人物に非があろうとも、これを是とし、称賛して然るべきところ、ポリュクラテースは称賛するどころか、告発弁論で相手の是を非とし、詰る以上に、ブーシーリスを貶している。「私」は同好の士としてその誤りを正したい。あるべき頌辞の範を示したい。そのため、人目を忍んで一書を呈するのだという。

具体的な倒錯を指摘した後、「私」はブーシーリス王を頌え、アイギュプトス建国と麗しい国体の樹立、秀でた文化の涵養にかかる事績を具体的に描き出す。ギリシア文化圏はその余慶を被り、今日の偉大と済美があるのだという。ピュタゴラスも同様の見解を示していることを指陳して一場の垂範を終えるかに見えた「私」は一転、語気も激しくポリュクラテースを指弾していわく、貴公は私を詰るのだろう、アイギュプトスの優秀を頌えながら、それがブーシーリスのなすところであると一向に証明していないではないかと。さらに言う。余人にしかく責められるならば、研鑽の賜かともいいますが、こと貴公に限っては、そうした難詰をするがらではなかろうと⁽¹⁵⁾。

「私」はポリュクラテースがブーシーリス王の偉功を証明しようとして、却ってその悖戻を暴き立てるばかりであった『ブーシーリス擁護弁論』の非をあげつらう。さらに「私」はいう。自分の立論は頌辞であり、擁護にふさわしく、その点でも貴公の暴論に勝る。ま

(14) 『ブーシーリス』の概略は次の通りである。破題（1-8：書翰呈上の口上〈1-3〉、ポリュクラテース『ブーシーリス擁護弁論』（ならびに『ソークラテース告発弁論』）批判〈4-8〉）、頌辞見本の開陳（9-29：ブーシーリスの家系〈10-11〉、アイギュプトスの地勢〈11-14〉、同国体〈15-20〉、同知恵分別〈21-23〉、同敬神〈24-27〉、同清浄〈28-29〉）、想定駁論への反駁（30-43：二つの頌辞の比較〈30-33〉）、跋語（44-50）である。執筆年代は前370年代前半と推測されるが、確証はない。N. Livingstone, *A Commentary on Isocrates' BUSIRIS*. Leiden/Boston/Köln: Brill, pp.40-47.

(15) Isoc. 11.30: Ἵσως ἂν οὖν τοῖς εἰρημένους ἀπαντήσεις, ὅτι τὴν μὲν χώραν καὶ τοὺς νόμους καὶ τὴν εὐσέβειαν, ἔτι δὲ τὴν φιλοσοφίαν ἐπαυῶ τὴν Αἰγυπτίων, ὥς δὲ τούτων αἴτιος ἦν ὃν ὑπεθέμην οὐδεμίαν ἔχω λέγειν ἀποδείξω. Ἐγὼ δ' εἰ μὲν ἄλλος τίς μοι τὸν τρόπον τοῦτον ἐπέπληττεν, ἡγοῦμην ἂν αὐτὸν πεπαιδευμένως ἐπιτιμᾶν· σοὶ δ' οὐ προσήκει ταύτην ποιέσθαι τὴν ἐπίληψιν.

た自分の所説で直接の証明がなかったとしても、蓋然性を考慮すれば、同様の結論にならざるを得ない。非現実的なことを口にする貴公の拙劣とは霄壤の差である。

ポリュクラテースの作物の言辞を蓋然性の議論で完膚なきまでに叩きのめし、その陋劣を論証した上で、最後の抗弁の道も墮いでいう。最悪のケースでも擁護をする思考実験である、その場合の擁護弁論はこうなるというモデル、サンプルを示したに過ぎないと貴公が言うのであれば、ただでさえ累卵の危うきにあるピロソピアー φιλοσοφία をいよいよ毀損することになる、と⁽¹⁶⁾。

何のための文章なのだろうか。

演示弁論 ἐπιδείξις である——アリストテレースの分類を使えば、そうなるだろう⁽¹⁷⁾。誰に何を「演示」しているのか。常識では非とされるものを敢えて是として見せる逆説 παράδοξος λόγος であり、作者であるソフィストが己の力量を誇示して顧客を獲得する底のものなのであろうか。しかしイソクラテースの『ブーシーリス』がポリュクラテースを徹底的に批判することで示し得た技能、力量とは何であろう。逆説を構えるソフィストが相反する言論 ἀντιλογία を並べて比べる手際であろうか⁽¹⁸⁾。たしかに『ブーシーリス』ではポリュクラテースの頌辞を換骨奪胎して痛罵に組み替える。そうした換骨奪胎を許さぬ真の頌辞を手本として提示しようともしている。

さらに手の込んだ議論もある。頌辞 ἐγκώμιον と弁疏、擁護弁論 ἀπολογία との関係繞る論考に聴こう⁽¹⁹⁾。曰くイソクラテース第十番弁論『ヘレネー』では、先達ゴルギアース『ヘレネー頌』を批判する⁽²⁰⁾。主題はよい。形式に狂いがある。「ヘレネーにまつわる頌辞をものしたと言いながら、同女の所業についての弁疏を口にした格好だからである」⁽²¹⁾。頌辞と弁疏、擁護演説との区別を立て、それを遵守せよと言うのである。ゴルギアースの『ヘレネー頌』は頌辞が弁疏へと移ろう構えとなっている。イソクラテース第十六番弁論『戦車について』では弁者の父、アルキビアデースの名誉を挽回すべく、種々弁疏を試みるうちに、頌辞の性質を帯びてゆく。頌辞、弁疏の別をやかましく言い立てたイソクラテースが自家撞着を起こしている。さらに第十一番弁論『ブーシーリス』に言う。「誰かを言祝ごう εὐλογεῖν と望む者は、対象となる人物に実際よりもあまたの美質が備わってい

(16) Isoc. 11.48.

(17) Arist. Rh. 1328a36–b7. 審議弁論、法廷弁論、演示弁論の三つに区分している。

(18) M. Gagarin, 'Did the Sophist Aim to Persuade?', *Rhetorica* 19-3(2001)275–291.

(19) E. Alexiou, 'Isokrates *De bigis* und die Entwicklung des Prosa-Enkomions', *Hermes* 139-1 (2011)316–336.

(20) ゴルギアース『ヘレネー頌』の邦訳は納富信留『ソフィストとは誰か?』（京都、人文書院、2006）139–145 を見よ。同書 146–174 に同篇を繞る考察を載せる。

(21) Isoc. 10.14.

ることを示してゆかねばならないし、告発をしようとするなら正反対のことをしていく必要がある。誰も弁えているところである。ところが貴公、斯様に弁舌を振るったというにはほど遠く、プーシーリスのために弁疏を行う ἀπολογίασθαι と口にしなが、いま彼に浴びせかけられている罵詈謗を取り除くどころか、途方もない脱法行為を彼になすりつける有様である。何人たりといえどもこれを凌ぐ脱法行為などは見つけかねよう。普通はプーシーリスに悪罵を浴びせるにしても、異邦からアイギュプトスへと到来した人々を生贄に捧げていたと罵るばかりだというのに、貴公ときたらプーシーリスが生贄に捧げられた人々をさらに貪り食ってもいたと言って責め立てる。ソクラテースの断罪に乗り出せば、頌辞を捧げようとばかりに、アルキビアデースをその門人にする。彼がソクラテースに教えを受けていたのを見聞きたことがある者は絶えていない。ヘッラス人中、異色の麒麟児であったことは万人が等しく認めるところであろうが⁽²²⁾。ここに「頌辞を捧げる、言祝ぐ εὐλογεῖν」と「弁疏を行う ἀπολογίασθαι」が近接して用いられ（かつ「弁疏を行う」の対義語「断罪する κατηγορεῖν」と正反対の事態として「言祝ぐ」の類語「頌辞を捧げる ἐγκωμιάσαι」が想定され）ているため、事実上、頌辞と弁疏とが一体化しているのではないか。その両者が一体となって、告発と対比されているのではないか。さらに議論は続く。イソクラテース『プーシーリス』中、頌辞（9-29）に続く件（30-43）は弁疏であり、両々相俟ってプーシーリスを言祝ぐ実例を提示しているのだ、と⁽²³⁾。対立する言論に基づく行論ではないにせよ、補完的な議論が一体となっている点では ἀντιλογίαに通じるところもある⁽²⁴⁾。

(22) Isoc. 11.4-5: Ἀπάντων γὰρ εἰδότεων ὅτι δεῖ τοὺς μὲν εὐλογεῖν τινὰς βουλομένους πλείω τῶν ὑπαρχόντων ἀγαθῶν αὐτοῖς προσόντ' ἀποφαίνειν, τοὺς δὲ κατηγοροῦντας τάναντία τούτων ποιεῖν, (5) τοσοῦτου δεῖς οὕτω κεκρήσθαι τοῖς λόγοις ὥσθ' ὑπὲρ μὲν Βουσίριδος ἀπολογίασθαι φάσκων οὐχ ὅπως τῆς ὑπαρχούσης αὐτὸν διαβολῆς ἀπήλλαξας, ἀλλὰ καὶ τηλικαύτην αὐτῷ τὸ μέγεθος παρανομίαν προσήμας, ἣς οὐκ ἔσθ' ὅπως ἂν τις δεωστέραν ἐξευρεῖν δυνηθείη· τῶν γὰρ ἄλλων τῶν ἐπιχειρησάντων ἐκείνον λαιδορεῖν τοσοῦτον μόνον περὶ αὐτοῦ βλασφημούντων ὡς ἔθνε τῶν ξένων τοὺς ἀφικνουμένους, σὺ καὶ κατεσθίειν αὐτὸν τοὺς ἀνθρώπους ἡτιάσας. Σωκράτους δὲ κατηγορεῖν ἐπιχειρήσας, ὥσπερ ἐγκωμιάσαι βουλούμενος Ἀλκιβιάδην ἔδωκας αὐτῷ μαθητὴν, ὃν ὑπ' ἐκείνου μὲν οὐδεὶς ᾔσθετο παιδευόμενον, ὅτι δὲ πολὺ δύνεγκε τῶν Ἑλλήνων, ἅπαντες ἂν ὁμολογήσειαν.

(23) Alexiou 2011, p.333: 'Die beiden Teile sind nur so zu erklären, daß das Verhältnis, in dem sie zueinander stehen, nicht das eines Gegensatzes, sondern das einer Zusammenstellung und Ergänzung ist. Apologie und Enkomion ergänzen einander und sind in die enkomiastische Strategie des Rhetors eingegliedert.' ただし、Isoc. 11.44 に至って頌辞と弁疏の各々について踏まえるべき作法が問題になっている。続けて告発を匂わせる行論も見える。Alexiou 2011 が考える以上に事態は複雑であると言えよう。

(24) cf. Alexiou 2011, p.334: 'die beiden Begriffe wie ein Hendiadyn zusammenkommen (9, 44).'

右の読解には首肯しかねるところがある。頌辞と弁疏とが一对になっているとしたら、それぞれアイギュプトス王ブーシーリスを褒め、弁じるものでなくてはならない。ところがイソクラテースの筆を辿れば、弁疏とされる箇所（30-43）で展開されるのは、「私」が即興で拵えてみせた直前の頌辞が妥当なものであり、少なくともポリュクラテースに勝るとも劣らないという、叙述の戦略の是非である⁽²⁵⁾。頌辞と弁疏の部分は対象を異にする。叙述の次元がずれている。

それにしても、彼我の優劣を論じるのにさまで「私」が激高する必要はなかろう。自分の非を相手の非と比べてまだましだと述べることにどのような意味があるのであろう。『ブーシーリス』は類似の逆説であるイソクラテース第十番弁論『ヘレネー』と対になって初めて意味を持つのだという読み方がある⁽²⁶⁾。伝来の写本、活字に組まれた全集で個々の作品を読み比べれば、そうした考え方もあり得よう。しかし、個々の作品は一篇一篇世に出たものである。上梓の段階で外部の作品と一对のものとして読めというのは、シリーズ本や連載とは無縁の当時、読者、聴衆に対して過大な要求であると言わざるを得ない⁽²⁷⁾。

三

『ブーシーリス』の劈頭に戻ろう。まだ相見えぬ後進に内状を送り、新作の不備を論し、導くのではなかったか。「貴公が程を弁えていることは、ポリュクラテース、また暮らし向きが変わったことについてもまた、当方、人伝てに伺って承知している。これまでにお書きになった御作も何点かは私自身で繙いた以上、貴殿が余儀なく携わることとなった教育の万般について、貴殿と直接、腹藏なく話し合えたら何よりであったのだが〔叶わず残念である〕。故なくして不運に見舞われ〔たがゆえに〕知の探求 *φιλοσοφία* で生活を立てていこうと望んでいる人々に対して、その道で経験を積み、熟練の域にある者が〔先達として〕こうした無尽を進んで行ってしかるべきだと私は思っている。〔2〕とはいえ、互いにまだ面識も得ずにいるので、いつの日か何かの拍子に行き会うようなことでもあれば、その折にあれこれじっくりと膝詰めで語り合うことができるだろうから〔それを待つとし

(25) Livingstone 2001, p.162.

(26) T. G. M. Blank, *Logos und Praxis: Sparta als politisches Exemplum in den Schriften des Isokrates*. Berlin: de Gruyter, 2014, 79-155; idem, 'Isocrates on Paradoxical Discourse: An Analysis of Helen and Busiris', *Rhetorica* 31-1 (2013), 1-33.

(27) 前提の矛盾が全体の破綻を将来することを実地に示し、成功例の『ヘレネー』と対をなすのだという。Blank 2013, p.30.『ヘレネー』と『ブーシーリス』が（限りなく）同時に上梓されれば効果が削がれるであろう。Blank 2013, p.31 以下、議論の菌切れが悪くなるのもそのせいである。

て)、今日ただいま私が貴殿の御役にたてそうなことは〔こうしてすぐに〕貴殿に書翰で書き送り、できる限り余人の目に触れぬようにするのがよいだろうと考え〔て、一書を呈し〕た次第である」⁽²⁸⁾。

我々はその内状を読んでいる。この時点で既におかしいことに思い至る。第4節、第5節でポリュクラテースの倒錯を指摘するよりも前の段階で形式上の倒錯を「私」自身が犯している矛盾、倒錯⁽²⁹⁾。そもそも残虐で聞こえた異邦の古王の弁疏をするところからして逆説 *παράδοξος λόγος* の傾きが顕著であり、しかもその異邦が他ならぬアイギュプトス、即ちヘッラスを逆しまにしたような国である⁽³⁰⁾。顛倒に貫かれたテキストがこの『プーシーリス』なのではないか。

第6節以降でポリュクラテース『プーシーリス擁護弁論』批判を展開する直前、総論としてその倒錯ぶりを述べる件に言及のあったアルキビアデースのことが脳裏を掠める⁽³¹⁾。「ヘッラス人中、異色の麒麟児 *πολὺν διήνεγκε τῶν Ἑλλήνων*」は無論、褒詞ながら、用いられている動詞 *διαφέρω* は「行き方を異にする」「違う」を本義とする。アルキビアデースは大方のヘッラス人とは違う。弁舌巧みに民会を丸め込み、シケリアー遠征を実行に移す。艦艦を連ねて解纜した直後に瀆神の嫌疑をかけられ、単身帰還を命ぜられるや、その命令を無視して征旅より逐電、敵方ラケダイモンに奔り、祖国アテーナイの軍略を相手に解き明かして窮地に追いやっている⁽³²⁾。その彼をソークラテースの弟子に据えることが

(28) Isoc. 11.1–2: Τὴν μὲν ἐπιείκειαν τὴν σὴν, ὦ Πολύκρατες, καὶ τὴν τοῦ βίου μεταβολὴν παρ' ἄλλων πυνθανόμενος οἶδα· τῶν δὲ λόγων τινὰς ὧν γέγραφας αὐτὸς ἀνεγνωκὼς ἤδιστα μὲν ἂν σοι περὶ ὅλης ἐπαρρησιασάμην τῆς παιδεύσεως περὶ ἣν ἠνάγκασαι διατρίβειν· ἡγοῦμαι γὰρ τοῖς ἀναξίως μὲν δυστυχοῦσιν, ἐκ δὲ φιλοσοφίας χρηματίζεσθαι ζητοῦσιν ἅπαντας τοὺς πλείω πεπραγματευμένους καὶ μᾶλλον ἀπηκριβωμένους προσήκειν ἐθελοντὰς τοῦτον εἰσφέρειν τὸν ἔρανον· (2) ἐπειδὴ δ' οὐπω περιτετυχήκαμεν ἀλλήλοις, περὶ μὲν τῶν ἄλλων, ἣν ποτ' εἰς ταῦτόν ἐλθωμεν, τόθ' ἡμῖν ἐξέσται διὰ πλειόνων ποιήσασθαι τὴν συνουσίαν, ἃ δ' ἐν τῷ παρόντι δυνάμην ἂν εὐεργετήσαι σε, ταῦτα δ' ὥρθηται χρῆναι σοὶ μὲν ἐπιστεῖλαι, πρὸς δὲ τοὺς ἄλλους ὡς οἶόν τε μάλιστα ἀποκρύνεσθαι. 訳文中の [] は語気を写し、文意を明らかにすべく稿者が補い入れた箇所を示す。

(29) cf. Livingstone 2001, pp.5–8. 書翰と書翰文学、またそれ以外の形式の散文にまたがるジャンルの問題については、今は取り上げない。

(30) Hdt. 2.35.5: Αἰγύπτιοι ἅμα τῷ οὐρανῷ τῷ κατὰ σφέας ἐόντι ἑτεροίῳ καὶ τῷ ποταμῷ φύσιν ἀλλοίην παρεχομένῳ ἢ οἱ ἄλλοι ποταμοί, τὰ πολλὰ πάντα ἔμπαλιν τοῖσι ἄλλοις ἀνθρώποις ἐστίσαντο ἥθεά τε καὶ νόμους. R. Thomas, *Herodotus in Context: Ethnography, Science and the Art of Persuasion*. Cambridge: Cambridge University Press, 2000, p.112; J. Gould, *Herodotus*. London: Weidenfeld and Nicolson, 1989, p.9.

(31) 註(22)を見よ。

(32) Plut. *Alc.* イソクラテースが *διαφέρω* に貶義をこめる箇所については Livingstone 2001, p.109, lemma *πολὺν διήνεγκε τῶν Ἑλλήνων*. 両義的な句法については、A. E. J. Bons, 'ἀμφιβολία:

称賛に値するといい、「泉下に下った人々が思いをめぐらせるようになるようなことでもあれば、ソークラテースはポリュクラテースに対して、告発をして下さり、忝い、と手篤く礼を述べるだろう。自分のことを褒め称えるのが習性の人々に対しても、ソークラテースがここまでの感謝を捧げることはない」⁽³³⁾。この件をどう読めばいいのであろう。

註釈にいう。ポリュクラテースが『ソークラテース告発』中で捏造したのは、アルキビアデースがソークラテースの教えを受けた弟子であるという点であり、二人が親しい間柄であったこと自体は事実である⁽³⁴⁾。さらに曰く、およそ教育に携わるものであれば、高名、有力な弟子を擁したいと願うものであり、だからこそソークラテースは弟子でもないアルキビアデースを弟子だと言いつのってくれたポリュクラテースに感謝するのだという理屈である⁽³⁵⁾。整理しよう。アルキビアデースはソークラテースの知人の傑士であり、是非ともその師でありたい逸材だというのはのである。それを弁えずに二人の師承を言い立てて、ソークラテースを貶めたつもりになっているポリュクラテースの倒錯は明白だということである。

ここには今一段の倒錯があると見た方がよい。ソークラテースの鳴謝に関する註釈にヒントがある。

'Isocrates had composed praise of Alcibiades in the speech *On the Yoke*, but even so it is surprising that in *Busiris* he could so confidently dismiss the idea that association with him was discreditable.'⁽³⁶⁾

アルキビアデースは傑物高士ではなく、むしろ札付きというべき人物であった。ポリュクラテースの倒錯の前提がそもそも倒錯しているのである。いま、文脈に齟齬を来すことなくこの件を読むために、イソクラテース第十六番弁論『戦車について』を引きつつ、やはり割り切れないものを感じて漏らした困惑が'surprising'の一語に結実している。倒錯を指摘する土台そのものが倒錯している。

四

「言うべきことは多く、頌辞も弁疏もまだまだ続けられはするけれども、長々と話をのばすべきではあるまい。他の人々に演示をして見せようとしてことばを連ねてきたわけで

Isocrates and Written Composition', *Mnemosyne* IV 45-2(1993)160-171.

(33) Isoc. 11.6.

(34) Livingstone 2001, pp.37-38, p.109, lemma Ἀλκιβιάδην ... μαθητὴν ... παιδευόμενον.

(35) Livingstone 2001, p.110, lemma ἔχοι χάριν.

(36) Livingstone 2001, ibid.

はない。それぞれの論題をどのようにこなすべきなのか、貴公に垂示をと望んでのことである。とにかく貴公が書き綴った演説を人がブーシーリスのための弁疏ではなく、[かの王に] なすりつけられている罪状の数々を肯うものだと思っても、それは無理からぬことなのだから」⁽³⁷⁾。一篇を閉じる結語に近づき、再び内状を呈したことをほのめかす。

「他の人々に演示 ἐπιδείξιν をして見せよう」としたのではなく、「垂示 ὑποδείξαι を望ん」だのだという。何かの上に乗っていることを示す ἐπὶ、何かの下に、あるいは下からをいう ὑπό という対比も心憎く⁽³⁸⁾、また後者には秘めやかなものに連なる語法もあって、いよいよ内状であることを浮き彫りにしつつ、演説、話、ことば λόγος を語るのではなく「書き綴り συνέγραψας、内状を呈した「私」が「ことばを連ねてきた διείλεγμαί」と書き立てる。言うまでもなく「対話する」という意味が響く διαλέγομαι という動詞であり、「対話篇 διαλεκτική」を生み出すことばである。もちろん、文中に対話を思わせる件はない。「私」がポリュクラテースに投げつけるとげとげしいことばがあるだけである⁽³⁹⁾。そもそも面会を後回しにして書翰を送付している体裁なのだから、対話をする余地はない。

書契と口頭という二つの媒体が挙げられ、それぞれに関連の深い動詞を相互に入れ替え、耳目を歛てる連語を生み出していることにも注意したい。矛盾であり、倒錯である。小さなことかも知れない。しかし冒頭で書翰という枠組を打ち出しながら、その虚構を筆者が自ら踏み躪ったことに鑑みれば、ここに会話を強く含意する動詞 διείλεγμαί と、書翰という一方通行の黙せる媒体とを結びつけることには、相応の意味と意図があると考えられるのではないか。そればかりではない。第3節を引こう。「助言を受ける立場にある者のほとんどが、その助言の裨益するところに注目しようとはせずに、人が己の過ちを鋭く吟味すればするほど、人の話を聞くのが嫌になる性分であるということは、当方も承知している。とはいえ、人様によかれと思ってふるまう者は、そうやって嫌われることに二の足を踏むべきではなく、助言をしようとする人々に対してそのような料簡でいる側の考えを変えていくよう努める必要があるのだ」⁽⁴⁰⁾。第30節に至って「私」がポリュクラテース

(37) Isoc. 11.44: Πολλῶν δ' ἐνόντων εἰπεῖν ἐξ ὧν ἂν τις καὶ τὸν ἔπαινον καὶ τὴν ἀπολογίαν μὴ κύνειεν, οὐχ ἡγοῦμαι δεῖν μακρολογεῖν· οὐ γὰρ ἐπιδείξιν τοῖς ἄλλοις ποιούμενος, ἀλλ' ὑποδείξαι σοι βουλόμενος ὡς χρὴ τούτων ἑκάτερον ποιεῖν, διείλεγμαί περὶ αὐτῶν, ἐπεὶ τόν γε λόγον ὃν συνέγραψας, οὐκ ἀπολογίαν ὑπὲρ Βουσίριδος, ἀλλ' ὁμολογίαν τῶν ἐπικαλουμένων δικαίως ἂν τις εἶναι νομίσειεν.

(38) このままでも対句を意図していることは明らかであるが、同じ文の ἀπολογίαν, ὁμολογίαν の対を見れば、その意図の存在はもはや疑式の余地はあるまい。

(39) 註(15)。

(40) Isoc. 11.3: Γινώσκω μὲν οὖν ὅτι τοῖς πλείστοις τῶν νοουθετουμένων ἔμφυτον ἐστὶν μὴ πρὸς τὰς ὠφελείας ἀποβλέπειν, ἀλλὰ τοσοῦτ' ἁλεπώτερον ἀκούειν τῶν λεγομένων ὅσ' περ ἂν αὐτῶν τις ἀκριβέστερον ἐξετάζη τὰς ἀμαρτίας· ὁμῶς δ' οὐκ ὀκνητέον ὑπομένειν ταύτην τὴν ἀπέχθειαν τοῖς

にぶつける悪態は、この方針と矛盾する⁽⁴¹⁾。少なくとも文字面が伝える趣旨とは相容れない⁽⁴²⁾。内状を公にし、微に入り細を穿って相手を扱き下ろせば、当然、説論は届かない。剩れ「私」は途中で激高し、一方的に己の正当性を言い立てている。およそ書翰の趣とは正反対の決意が冒頭に掲げられていることになる。*ὑποδείξει* や *διείλεγμα* が白々しい。

「私の言うところにしたがうならば、今後筋の通らない主題を構えることはまずもってなくなるであろうし、さなくとも、自分で自分を詰まらなく見せたり、自分にならおうとする者を駄目にしたり、ことばをめぐる教育を台無しにしたりするようなことのないものを語っていかうとするだろう。[50] また貴殿、驚いてはいけない。私が年若で、貴殿とは何の縁故もない身でありながら、いきなり貴殿の譴責に手を染めたからといって。思うに、こうしたことがらについて助言を行うのは、最も年嵩、一番身近な者の任ではなく、最も事情に明るく、なおかつ手をかそうという気持ちのある者の責務なのである」⁽⁴³⁾。

冒頭で「その道で経験を積み、熟練の域にある者が〔先達として〕」同好の士ポリュクラテースに話しかけているのを読んでいる筈であった⁽⁴⁴⁾。一篇の締め括りに、その構図、その思い込み自体もまた覆されてしまう。*νεώτερος* を「さほどの年配ではない」という絶対比較と取り、「私」がポリュクラテースよりも年下であることを意味しないという解釈は苦しい。「私」がポリュクラテースよりも若く、二人ながらに年配と読めば、年長のポリュクラテースは年格好に相応しい見識、技量を身につけていないということになり、その未熟、その魯鈍がいよいよ浮き彫りなる⁽⁴⁵⁾。ただ「何の縁故もない *μηδέν σοι προσήκων*」が「一番身近な *τῶν οἰκειοτάτων*」と対になるのであれば、「最も年嵩 *τῶν πρεσβυτάτων*」と対になるのは「ポリュクラテースよりも年長／年少ながら、そこまで歳を取ってはいな

εὐνοϊκῶς πρὸς τινος ἔχουσιν, ἀλλὰ πειρατέον μεθιστάναι τὴν δόξαν τῶν οὕτω πρὸς τοὺς συμβουλευόντας διακειμένων.

(41) 註(15)。

(42) それとは違う次元で悟りを促している可能性は大きい。

(43) Isoc. 11.49–50: Ἦν οὖν ἐμοὶ πείθῃ, μάλιστα μὲν οὐ ποιήσει τοῦ λοιποῦ πονηρὰς ὑποθέσεις, εἰ δὲ μή, τοιαῦτα ζητήσεις λέγειν ἐξ ὧν μήτ' αὐτὸς χείρων εἶναι δόξεις μήτε τοὺς μιμουμένους λυμανεῖ μήτε τὴν περὶ τοὺς λόγους παιδεύειν διαβαλεῖς. Καὶ μὴ θαυμάσης, εἰ νεώτερος ὢν καὶ μηδέν σοι προσήκων οὕτω προχείρως ἐπιχειρῶ σε νοθετεῖν ἡγοῦμαι γὰρ οὐ τῶν πρεσβυτάτων οὐδὲ τῶν οἰκειοτάτων, ἀλλὰ τῶν πλείστ' εἰδότην καὶ βουλομένων ὠφελεῖν ἔργον εἶναι περὶ τῶν τοιούτων συμβουλευεῖν. Isoc. 11.49 の後半に Isoc. 12.272 を思い出す。τῶν γὰρ οὕτω διοικούντων τὰς αὐτῶν διανοίας οὐκ ἔστιν ὅστις ἂν τοὺς τοιούτους ἀνοήτους εἶναι νομίσαιεν.

(44) 註(28)。

(45) cf. Livingstone 2001, p.194, lemma *μὴ θαυμάσης, εἰ νεώτερος ὢν ...*, p.194 et sq., lemma *νεώτερος ὢν καὶ μηδέν σοι προσήκων ... οὐ τῶν πρεσβυτάτων οὐδὲ τῶν οἰκειοτάτων*.

い」ではなく⁽⁴⁶⁾、「ポリュクラテースよりも年下で若い」となる筈である。そう響くことを当て込んでいる筈である。さてこそ肝腎なのは見識と熱意だという対比が活きてくる。

『ブーシーリス』の首尾が呼応していることはもはや疑いあるまい。冒頭（の印象）を末尾で覆す。矛盾、倒錯である。破題、跋語それぞれの内部にも矛盾、倒錯が潜んでいる。冒頭では形式を裏切っていた。末尾に相当するものはあるだろうか。矛盾、倒錯に満ちた「私のいうところにしたが」うとは如何なることか、それで避け得る「筋の通らない主題」がどのようなものなのかといったことは措く。そもそも『ブーシーリス』の主題に筋が通っているのかどうか、俄には判らない。判ってはいけない。「最も事情に明るく、なおかつ手のかさうという気持ちのある者」が助言の責を負う「こうしたことがら τῶν τοιούτων」の実態が明示されていないことに留意したい。通常は前後に実態を説明する語句を伴う指示形容詞が、ここでは限りなく文章の最後に、頻用される語句と連用されることもなく置いてある。逆しまに貫かれ、倒錯に満ちた文章の掉尾に単独で用いられてある。内容が空疎であるかに見える。

ここに至って、読者、聴衆は本編がどのようなことがらを取り扱おうとし、それをどのように取り扱ったのかを考え直すよう迫られる。自己言及性の強いテキストである⁽⁴⁷⁾。「私」自身が述べているところを額面通りに解せば、演示 ἐπίδειξις ではない⁽⁴⁸⁾。通常の三区分で残るのは法定弁論と審議弁論である⁽⁴⁹⁾。イソクラテース『ブーシーリス』は勿論、そのいずれでもない。この三区分と分かち難く結びついている（後代の）*ῥητορικὴ* とは一線を画すものであることがうかがえる。ジャンルを跨ぎ、ジャンルと結びついた媒体を超えようと試みるイソクラテースの筆法は第十二番弁論『パナテーナイコス』に顕著である⁽⁵⁰⁾。同篇では冒頭に避けるべき文体と技巧を長々と述べながら、目指す文体については口を噤んだ。作品の末尾に至って望ましい文章の在り方を仄めかすけれども、それが同作品に該当するか否かを判定するためには、全体の構造を俯瞰しつつ再読せねばならない（し、その必要性に気づきにくい仕掛けを施してもある）。『ブーシーリス』の仕掛けと通じるものがある。イソクラテースの問題意識の所在を教えるものとは言えまいか。

(46) 「一番身近な」の対をその否定形である「一番身近ではない」（＝二番目以降の身近さである）と読むならば話は別であるが、*μεδέν σοι προσήκων* というギリシア語はそのような解釈を許さない。

(47) cf. E. V. Haskins, *Logos and Power in Isocrates and Aristotle*. Columbia, S. C.: University of South Carolina Press, 2004, p.16.

(48) 註(37)。

(49) 註(17)。

(50) S. Ueno, 'Towards a Historical Interpretation of Isocrates' *Panathenaicus*', *Kodai* 16(2015)69-90. cf. P. Roth, *Der PANATHENAIKOS des Isokrates: Übersetzung und Kommentar*. München/Leipzig: K. G. Sauer, 2003, ad locum.

五

措辞結構にこもる意味、意義に着目してイソクラテースの読解を進めようとする読み方がある⁽⁵¹⁾。所説の読解に注力する hermeneutical reading に対して rhetorical reading を称する読み方である。イソクラテースが修辞の研究、教育で破格の成功を収めた理由を求めて、教則や書物による修辞の速成教育を著しく困難、あるいは不可とし、歳月を費やして私塾で蘊奥の瀉瓶を行う仕組みを作り上げた点に注目する。修辞という営みを把握し、組織化しようとする機運が高まりつつある中、その矛盾を衝き、限界を示す修辞とことば、思考を手にし、世に問うたが故に、修辞に志す者の関心を強く惹き付け、その門を叩かしたのだという。所説に惑うことなく構造に着目したこと、イソクラテースがアリストテレース的な修辞学とは異なる問題意識で活動をしていたことを明らかにした功績は極めて大きい。

しかし、修辞伝授を脱構築する修辞を構えて新たな教育活動に乗り出すならば、脱構築をして見せるのは一度でよい筈である。イソクラテースの多作は却って脱構築の不徹底、劣化、あるいは失敗を思わせる恐れはないか。成功しているとするならば、くどい。イソクラテースの作品間で相互参照が行われていること、場合によってはイソクラテースが生前に全集を編んでいる可能性が囁かれていること、関連して写本に異同が少ないことに思いを致せば⁽⁵²⁾、くどさは増す。私塾を開く際に宣伝を兼ねた作品で脱構築を行ったことがあったにせよ⁽⁵³⁾、それだけで他の作品、例えばイソクラテース最後の雄編となった第十二番弁論『パナテーナイコス』の複雑怪奇な構造を説明することは叶わない。各編を再利用し、あるいは相互参照を行う折に、相応の意味と機能がなくてはならず、またそれを期待して旧作に光を当てる筈である⁽⁵⁴⁾。各編脱稿時とは自ずと異なる意味と機能を帯びることになる。同一の問題、類似の主題を取り扱いつつ、矛盾を孕んでいる場合はどうであろう⁽⁵⁵⁾。雄弁術の指南（の困難）には収まり切らない、あるいはこれとは異なる機能を託

(51) Cahn 1989.

(52) S. Martinelli Tempesta, 'L' « archétype » manquant: La transmission du corpus d'Isocrate et les problèmes de la *constitutio textus*' in: C. Bouchet/P. Giovannelli-Jouanna edd., *Isocrate: Entre jeu rhétorique et enjeux politiques*. Lyon: De Boccard, 2015, 21–31.

(53) Isoc. 13. Y. L. Too, *The Rhetoric of Identity in Isocrates: Text, Power, Pedagogy*. Cambridge: Cambridge University Press, 1995, 151–199; Cahn 1989, p.136 et sqq. cf. Isoc. *Ep.* 1, 6, 9.

(54) 実際にその旨を言明することもある。Isoc. 12.172.

(55) 例えば、アルキビアデースの取り扱いを想起せよ。Isoc. 11.5; Isoc. 16, passim. 市民教育 civic education の材にあてることも難しい。適切な指導者のいない場で人々が矛盾を孕んだ命題に思

していると考えねば説明がつかない⁽⁵⁶⁾。

修辞の脱構築に留まらず、修辞をめぐる言説、修辞をとりまく言説、すなわち当時の社会を支える言説の姿を浮き彫りにし、それを脱構築しようとしていると見たらどうであろう。ポリス社会にあるべきものの言い、ものの見方、即ち言説（あるいはアルチュセールにいわゆるイデオロギー）の探求と構築をこととしていたと考えたらどうであろう。そのものの言い、ものの見方を *πολιτικός λόγος* と呼び、その探求を *φιλοσοφία* と称していたとしたら⁽⁵⁷⁾。作品ごとの矛盾、構造、それを再利用、相互参照して作り上げる大きな矛盾、構造の塊は、多面的で複雑な社会の言説を考究し、剔抉し、脱構築を模索していく上で、恰好の教材になり得るのではないだろうか。少なくとも『ブーシーリス』の倒錯、矛盾、それと背馳する『馬車について』、また自らが『ヘレネー』で勸説する立論作法をそこで踏み躪る倒錯の類いを矛盾なく、整合的に解釈できる利点はあるだろう⁽⁵⁸⁾。

勿論、仮説である。

いをめぐらせることができるくらいならば、そもそもイソクラテースの私塾などは不要である。市民教育とイソクラテースについては、Poulakos/Depew 2004, in toto.

- (56) 所説に焦点を当てた読解でも同様である。K. Bringmann, 'Zweck und Voraussetzungen der isokratischen Redeliteratur' in: Orth 2003, 7–17. 実践的な修辞学の担い手が長年にわたり、自説の広播にしくじり、時勢を読み誤った閥歴が読者に伝え得るものがあるとすれば、イソクラテースの熱意であろうが、そのために彼が全集を編み、あるいは相互参照をし、旧作を再利用するであろうか。なお「弁論術」「雄弁術」の現場を離れ、その本義である説得も後景に退いた状態で、「修辞術」が文彩の手本として再利用するという主張を時に見かけるけれども、そうした主張が構造に仕込まれた倒錯、矛盾に言及することは極めてまれである。

- (57) *πολιτικός λόγος* はポリスに有益な主張、命題のように読むことが多い。e.g. T. Poulakos, *Speaking for the Polis: Isocrates' Rhetorical Education*, Columbia, S. C.: University of South Carolina, 1997.

- (58) したがって、『ブーシーリス』をはじめ、イソクラテースの作品はアリストテレス的なレトリケーの枠組、範疇に適合しない。cf. Livingstone 2001, pp.8–21. 加えて、イソクラテースの営為、またその *φιλοσοφία* はプラトーンと対立的、対比的に捉えられるものでもない。但し、そうした学説史自体が西洋文化史の一齣として重要な意義を持つことは言うまでもない。伝統的なイソクラテース理解を示すものとして、例えば廣川洋一『イソクラテースの修辞学校 西欧的教養の源泉』（東京、講談社、2005）は頗る有益である。また邦語では川島清吉「イソクラテースの「修辞学校」とプラトンの「アカデメイア」 政治哲学と教育を中心として」『教育学研究』38-2(1971)12–21を参照。なお、本稿は科研基盤研究(B)「民主政アテナイの演説文化：法廷における実践的修辞戦略に関する総合的研究」（研究課題／領域番号 17H02407、研究代表者佐藤昇、研究期間 2017–2020、研究機関神戸大学）の研究成果の一部である。